

2.2.1. コロナ禍における結婚式の開催と情報システムの利用

橋本 雄太

はじめに

本受託研究は冠婚葬祭の近代化を「情報化」という観点から明らかにすることを目的としている。筆者は人文情報学、特に歴史資料のデジタルアーカイブ化やその活用を専門とする研究者であり、情報技術に関する専門知識は備えているものの、冠婚葬祭についての知識は一般人以上のものは有していない。

ただ、2022年4月に自身が結婚式を挙げるという機会に恵まれた。結婚式そのものは対面式のイベントであったが、結婚式の準備期間を通じて、準備作業を円滑に進めるためのいくつかの情報システムを使用した。

本稿では、冠婚葬祭儀礼の情報化の事例報告として、筆者がこれらシステムを利用した自身の経験について述べる。

結婚式の概要と新型コロナウイルスの影響

筆者は自身の結婚式と披露宴を2022年4月3日（日）に、東京都千代田区の学士会館にて開催した。結婚式と披露宴はいずれも新郎新婦の親族、職場、友人らを招いて行うもので、午前中に会場付属のチャペルにて人前式の結婚式を実施し、午後に披露宴を実施した。新郎新婦を除く参加者は39名であった。

実は筆者は妻と2019年5月にすでに入籍しており、当初は2020年4月に結婚式を開催する予定であった。しかしながら新型コロナウイルスの流行のため、二度にわたって延期を余儀なくされたという経緯がある（一度目の延期は2020年4月、二度目の延期は2021年4月だった）。幸い、2022年3月21日に東京都の新型コロナウイルス感染症まん延防止等重点措置は解除され、翌月に式を実施することができた。ただし、解除後も東京都からの要請があり、披露宴会場の一卓あたりの人数は5名までに制限され、また卓上にはゲストを仕切るアクリル版が配置された。また、結婚式前日に筆者の親族のひとりが新型コロナウイルスに感染していたことが判明し、濃厚接触者である同居家族も含めた3名が欠席することになった。新婦側にも、発熱により直前に参加を見合わせたゲストがいた。式と披露宴の間、筆者と妻はマスクを外すため、ゲストの不安感を取り除くために式の前々日にPCR検査を受け、陰性であったことを司会者からアナウンスしてもらった。

結婚式準備のために利用したオンラインシステム

結婚式および披露宴の準備は、基本的に担当のウェディングプランナーとの対面の打ち合わせを通じておこなったが、招待者情報や引き出物の登録など分量の多いデータの入力と管理は「ONE-W」というWebシステムを利用した。これはPIEM株式会社

(<https://www.piem.jp/>) がブライダル事業者向けに開発・運営する Web サービスで、結婚式準備に関わるさまざまな作業を Web ブラウザ上で完結することができる。

ONE-W にはウェディングプランナーと新郎新婦それぞれが利用できる多種多様な機能が実装されている。筆者が新郎としてサイトにアクセスした際には、次のような機能が利用できた。

- イベントカレンダー
- 招待者情報登録
- 招待状の発送先・文面管理
- 招待者の出欠管理
- 引出物情報の管理
- 席次表のデザイン編集

たとえば「招待者」メニューでは、ゲストの姓名、肩書、敬称、住所といった情報を、新郎新婦それぞれのグループ（家族、親族、友人、職場関係）にカテゴリ分けして編集することができる。登録した情報を Excel 形式でダウンロードすることも可能である。また「席次表」メニューでは、これら招待者を披露宴会場の各テーブルへの割当を決めることができる。割当が完了すると、実際に配布される席次表のプレビューも生成することができる。

ONE-W システムと並んで「Wedding Sound System」という Web システムの使用もウェディングプランナーから依頼された。これは披露宴中に流す音楽を Web ブラウザ上で登録可能にするもので、会場の音響を担当する村上音楽事務所が提供するシステムである。新郎新婦は披露宴中に流したい音楽を、「新郎新婦入場」や「乾杯」「お色直し退場」といった各タイミングについて Wedding Sound System 上で指定することができる。流すことのできる曲目は登録済みのリスト（100 曲程度）から選択することができるが、リスト以外の曲目を使用したい場合は、CD 原盤を持ち込まねばならない。音楽のストリーミング再生が主流になった昨今、CD 原盤の持ち込みはやや時代錯誤にも思えるが、これは JASRAC と披露宴会場が結んでいる包括協定によってこのような方式になっているとのことである。

雑感：結婚式における情報化について

ONE-W が利用できたことで、新郎新婦側のデータ管理の手間、特に出席者に関する情報管理の手間はかなり軽減された。というのも、出席者の情報や出欠の可否は結婚式本番に向けて日々更新されるもので、出席者情報に変更がある度ウェディングプランナーに連絡すると多大な手間が生じるからだ。出席者のステータスを ONE-W 上で一元管理できたため、ウェディングプランナーとの情報共有は非常に楽であった。

ONE-W システムは結婚式の準備に関わる多くの工程を Web 上で完結させる手段を与えてくれるが、もちろんすべての工程が Web 上で完結する訳ではない。結婚式の進行や司会者とのやり取り、披露宴会場の装花やテーブルクロスを選択、料理コースの決定といった工程は ONE-W 上では機能として提供されておらず、ウェディングプランナーとの対面の打ち

合わせで決定した。これらの工程は各結婚式会場によって差異が大きく、システムとして実装することが難しいのだろうと思われる。逆に言えば、招待者や引出物の管理といった、多くの結婚式で共通する要素は標準化し、システム化していくことが、ブライダル事業者にとっては合理的である。新郎新婦側にとっても、情報を一元化できる Web システムが利用できるメリットは大きい。

今後とも、結婚式の多くの要素が ONE-W のようなシステムで管理できるように標準化されていくことと思われるが、あらゆる要素が標準化されパッケージされた結婚式は、個性の脱落した非常に無味乾燥なイベントになるだろう。他の冠婚葬祭儀礼と同様に、多くの人々にとって結婚式は「一回性」の高いイベントであって、標準化・大量製造を志向する情報システムとその意味では相性が悪い。少なくとも結婚式については、当面全面的なパッケージ化というものは起こらず、「一回性」を確保する形で情報化・システム化が進行していくのではないか。

ただし、こうした「一回性」をある程度確保しつつも、情報システム化を極限まで推し進め、非常に安価にブライダルサービスを提供するブライダル事業者が今後出現するかもしれない。若年層が既存のブライダルサービスのコストを負担に感じ、そうした安価なサービスを受け入れることがあれば、ブライダル事業の市況は大きく変化するだろう。IT 技術の活用によってそうした急激な変化が起きた業界は枚挙に暇がない。ブライダル事業に近い領域で言えば、婚活ビジネスはアプリの登場で一挙にシステム化が進行してしまった。

次年度以降の予定

筆者の結婚式を担当した学士会館のウェディングプランナーにヒアリングの依頼をし、快諾頂いている。まずヒアリングを通じて、ブライダル業界における情報化の現況と、事業者の情報化に寄せる期待や課題などを調査する予定である。

また、新型コロナウイルスの感染拡大期間には、ビデオ会議システムの Zoom を用いた「オンライン結婚式」も実施されたと耳にしている。こうした結婚式の事例についても調査をおこない、情報技術がどのように活用されていたか知見を広げていきたい。